

## 特集記事

この特集記事は、会員の相互の交流、情報交換の一助として、地理学、地理教育に関して会員が現在思うこと、あるいは地域で研究を進めていることなど形式にこだわらずなんでも自由に述べてもらうことを目的に新設しました。今後もこのような欄を設けていきますので、会員各位の活発なご投稿をお願いします。

(編集委員会)

### 清里の活性化に向けて

三 好 勲 (北海道清里高校)

#### 1. 地場産業の振興

##### ☆ いも焼酎工場・レストハウスの活用

焼酎工場……新製品の開発・珍しいものはないか？

○ アイディア商品…ビンへの工夫 毎年一品、町民のアイディア投入？  
毎年瓶のデザインを新しくすると、それを貯めて楽しむ人も出る。

○ 果実種の開発は出来ぬか？  
・ペペーミント・ハーブの花か葉入れ果実酒  
・斜里岳に咲く「えぞ白つじ」酒（花をいれると面白いのでは）  
・ナナカマド酒 スグリ（グスペリ）酒  
・やまいちご酒 フレップ酒  
・カラinz酒 山桜酒  
・山ぶどう酒 コクワ酒 など  
「清里いも焼酎」の宣伝をかねて、これらの開発を促進する。

○ アイディア焼酎名を？  
・町民のアイディアの採用「夢追酒」（町物産コンクールからさっそく採用してみてはいかがでしょうか）  
・斜里岳観光とあわせて、「斜里岳」の名をとった酒の名も欲しい。  
例（斜里岳おろし・きよさと」「名勝斜里岳・きよさと」などなど

○ 新製品 かぼちゃ焼酎やスマートな瓶入り試作新製品に期待。このような他の町でまだやっていない特別なもの開発が望まれる。

○ 札幌などに、町営の焼酎飲食店等の進出を計画出来ぬか？  
町の名の宣伝とともに焼酎の売上にもつながるのではないか。

##### ☆ レストハウスの活用化

○ 町民以外の人が（観光客が）気楽に立ち寄れる施設（町）にすること。（今でも立ち寄れる施設ではあるが、観光地としての施設に一層の転換をはかること）  
・焼酎工場見学と一体化したコースを設置。  
・食事のうまさで、全道有名になること。

○ レストハウスの近くに、物産加工場等の建設を（出来ないか）すすめる。  
および、その品物の販売。

レストハウスの近くに、例えば、オホーツク開拓資料館、博物館の建設、オホーツク自然館、オホーツク文学館

○ レストハウスでの地場産物の販売コーナーの展開。  
「きよさと」の地場観光物産の開発の必要性。  
現産物より多方面の製品開発の試みの必要性がある。旅行の二つ目の目的に、物を買う、お土産を買うと言う楽しみがあるので、そこにはねらいをつけることも大切である。

- ☆メロンの生産 出荷ルートの拡大 出荷時期よりよいメロンを求めて研究
- メロンの付加価値はないか ワインの加工、焼酎作成か
- ☆ 町物産コンクールの活用の仕方は適当か
- コンクール出品作品から毎年、必ず何点か町の財産として製品化へのこころみが必要と思われる。  
町民の関心が一段と高まること間違いない。
  - 反省 実施 合 反 合の考え方で町民のアイディアの採用を!  
この試みにより、町の中に新しい動きをつくることになる。
  - 意欲的な取り組み  
地場産業の開発・土産品の開発はどうしたら良いか?
    - ・民営型か、町の指導型か?
    - ・どこが振興をはかる機関となるか。振興委員会の設置は?
    - ・身近なところからでも手掛ける必要がある。

(津別町の双子桜のように町のシンボルをつくるのもよいのでは。町の掘り起しが今必要である。)
  - 町観光絵はがきの発行など。
- ☆ 高校卒業生をどうやったら町に引き留めができるか
- ・町の活性化
    - ・地場産業の振興……難しいが、町の大きな課題であり、ほおっておくわけにはいかない。
- ☆ 清里の観光資源の活用と町の活性化
- ・観光ルートの宣伝、方法の再確認、観光客を町に立ち寄らせる為の工夫を進める。
  - ・大学生の夏のトレーニング地に清里を!施設・宿舎などの建設の必要性あり。
  - ・地場産業の開発 町からの町民への働きかけがどうあるべきか。
  - ・清里温泉の名を高めるための方策はないか。
- メロン生産
- 主農産物を付加価値型産業へはかれぬか?  
・澱粉、ビート糖から面白い製品は作れぬか。
- 「清里」の名の良さをアピールし、人を多く呼び寄せる方法はないか?  
山梨県の清里にあやかって「リゾートきよさと」に近付けるための努力は出来ぬか。
- 住民の意識を高めるために「何を…」もとに町を発展させるか。「いも焼酎の町きよさと」にプラスする「何か…」を求める必要があるのでないか。
  - ・町活性化の原動力を求める事により、町民の意識の高まりを常にはかることが出来る。
  - 「農生産物型」プラス「新しい物」を求めて動きだす住民運動の展開が必要。
- ### 3. 可能な開発
- 「斜里岳」、「裏摩周」などの観光開発の再確認、活性化に向けて
  - 「焼酎工場」、「レストハウス」の活性化
  - 農産物加工への再検討  
山菜漬物工場、農産物漬物工場、きのこ生産加工、ハーブ製品化、メロンの加工はなどなど
  - 裏摩周のわき水の村利用は出来ぬか?  
わき水と金砂の製品化、縁起物としての販売。
  - 清里を売る  
「観光絵はがき」によって、清里の風景の良さの再確認をしあう。  
メルヘンきよさと・フォートの町清里を売り出す。  
(芸術の町清里・音楽の町、絵画の町やフォートの町清里でもよい。町を有名にする物を全面に打ち出すことが大切)  
「写真について」額入り、小額入り観光写真、観光写真、観光地開発をはかる。  
斜里岳、裏摩周、落葉松のきよさと、夕日のきよさと、いも畑のきよさと、牧歌的きよさとなどなど。
  - ・清里温泉のアピール
  - 人材発掘 人材発録 地場産業振興会の建設など

## 2. 住民意識の高揚など

- 町物産コンクールの活性化、実用化
- ハーブ組合 出荷型か製品加工型か

- 手軽な町のマスコットの選定。
  - 町の素敵なマスコットの制定
  - リス、シマリス、架空の動物など、まちにふさわしいもの。
  - 町民へのコンクール、マスコット人形・図案募集。
  - スタンプの製作、町の主要地点に設置、それを散策してもらうなどの方法を検討。
- 観光用小間物の開発 アイディアの採用（清里名入り）
  - 例えは
  - キーホルダー。木工土産品
  - ワイン工場アレンジ作品、
  - フォート入り作品の数々。新製品の開発製品化

## 現代社会への取り組みと地理

小松原 尚（北海高校）

北海高校の社会科では、1年生で現代社会を全員が学び、2年生では文系のみ地理、世界史、日本史から1科目選択することになっている。そして、3年生では、文・理系共通で必修政治経済（4単位）に加えて、文系のみ地理、世界史、日本史、政治経済から1科目選択（4単位）する構成になっている。私は、高校社会科の1年「現代社会」（4単位・2クラス）と2年「地理」（4単位・2クラス）を担当している。1年生の現代社会では政治・経済分野を中心に自主編成の授業に取り組んでいる。1983年度より「現代社会」担当の教員によって独自に編集したテキストを使った授業を行っている。政治分野では、日本国憲法の三大原則を近代日本の戦争の歴史を踏まえながら学び、経済分野では資本主義発達の歴史と現代の諸問題を日本と海外とのかかわりの中で学んでいく構成となっている。北海高校でこの現代社会テキストの編集への取り組みが開始されたのは、教科書の記述が生徒の問題意識との関連で不十分であり、寄り合所帯の担当者のそれぞれの得意の分野を生かしながら、単元によって教科書とともに使えるものにと企画した。

筆者がこの作業に参加しているのは、教師や大人にとって身近な話題を生徒に納得させ、生徒への問題意識の喚起を促すため、「発言させる」、「作業させる」ことを重視した授業をしたいと考えているからである。

その試みの一つとして、われわれをとりまく様々な問題を地図化したものを使って考えさせる指導に取り組んだ。このような問題意識をもったのは、目に「見えないもの」に弱い高校生たちの多い今日にあって、視覚に訴える授業を工夫していく必要性を筆者も強く感じているからである。

社会科教育における地図利用については地理教育において多大な実践の蓄積をみている。このような成果を正しく評価し十分活用することが総合科目としての「現代社会」の構築につながると筆者は考え、社会科教育における地図の構成に関する研究を行ってきた。その成果は、小松原（1987）において発表した。

また、小松原（1988）ではこれまでの地図にかかる先学の試みを「現代社会」教科書の範囲内において整理し一覧を作成し、多くの貴重な地図の比較検討と有効利用のための基礎資料とした。今後は、これまでの成果を踏まえつつ、食糧・農業に関する問題に関して、高校生に教えるためのテキスト作りに取り組みたいと考えている。

## 北海道の扇状地の特徴

斎 藤 享 治（北海学園大学）

日本の扇状地の分布やその形態・構造の特徴を明らかにしてきて、北海道には北海道独自の特徴があるのに気付いた。しかし、その特徴が何に起因するのか私自身によくわからないので、知っている人に御教示を願うため、あるいは明らかにしてもらいたいがために、その特徴を記載する。

### ①扇状地分布の偏在

面積 2 km<sup>2</sup> 以上、平均勾配 2% 以上の扇状地をもつ流域は、北海道に 89 箇所ある。その分布をみると、十勝平野（21 個）、石狩平野北部（13 個）、根釧台地（9 個）、富良野盆地（8 個）に集中する。一方、日高山脈西岸、稚内から網走までのオホーツク海沿岸平野、稚内から札幌までの日本海沿岸平野では、きわめて少ない。この偏在は何によるのであろうか。

### ②扇状地数が少ない

日本全体では、扇状地をもつ流域は 490 箇所あり、国土面積 762 km<sup>2</sup> に 1 箇所の割合で扇状地があることになる。北海道では、面積 877 km<sup>2</sup> に 1 箇所の割合なので、扇状地が少なくなっている。また、山地の出口（渓口）より上流の面積 200 km<sup>2</sup> 以上の流域では、北海道にある 68 流域のなかで、扇状地をもつ流域は 8 箇所なので、扇状地をもつ割合は 11.8% となる。日本全体では、294 流域のうち 72 流域で、その割合は 24.5% である。このように北海道では、扇状地をもつ

流域の割合が低くなっている。北海道の山地では、隆起の速さがゆっくりで、降水量も少ないので、削剥が進まないものと考えられる。さらに、山地と平地との境界を走る活断層もなく、扇状地を形成するための場も限られている。これらのことことが要因と考えられるが、どの因子が大きく左右しているのだろうか。

### ③完新世に形成された扇状地が少ない

完新世は、更新世にくらべ、扇状地の形成には都合の悪い時期という。しかし、そのような時期でも、日本全体では、277 流域で扇状地が形成され、扇状地をもつと認定された 490 流域のうち、56.5% を占める。一方、北海道では、完新世の扇状地は 23 箇所であり、全体の 25.8% にすぎない。北海道では、とりわけ完新世に扇状地ができにくいうようである。

### ④堆積物の薄い扇状地が多い

更新世（とくに立川期）には、薄い礫層の扇状地が比較的多く形成されている。更新世の扇状地の多い北海道では、堆積物の薄い扇状地が数多くみられる。形態・構造の類似性から、扇状地は、A 型（小型開析薄層）、B 型（中型開析中厚層）、C 型（小型現成中厚層）、D 型（大型現成中厚層）に分けられる。堆積物の薄い A・B 型扇状地は、北海道では 37 個あり、全体の 41.6% を占める。日本では 157 個、32.0% であり、北海道が多い。

## 美利河川の砂金採取跡地

貞 方 昇（北海道教育大学函館分校）

道南の大千軒岳の麓を流れる知内川では、江戸時代の初めごろ、多くのキリストンがやってきて、大がかりに砂金採取を行っていたという話は、その後の悲話とともに、函館辺りではよく知られている。三年前に広島から転じてきた私にとっては、それだけでもロマ

ンを誘われる話なのであるが、ある人が教えてくれたことには、今でも知内川の河原で 4—5 時間頑張れば数粒採れるという。さすがは北海道と驚いたものである。

ただ、その話を聞いたとき、自分が自然地理学を生

業としている手前、秘かに期待することがあった。と言うのは、砂金採取なるものは普通、現在の河原の土砂をふるい分け、椀がけして砂金粒を探すという手順になるのであろうが、多くの先学が明らかにしてきたように、北海道の河川流域には大抵、河岸段丘の発達がよい。そこで、昔人が血眼になって採り尽くした河床を探すよりも、河岸段丘にあがって、その段丘を構成する砂礫層を掘れば、その砂の中にあるたくさんの砂金が輝くのを見つけられるはずだと考えたのである。

昨年の7月に、幸いにも、今金町の教育委員会の人から話があって、松前藩の隠し金山であったといわれる美利河川上流一帯を見に行く機会を持つことができた。ここは現在、多目的ダムの建設中で、水没域の木を伐ったところが、多くの採取跡地が現れてきた所である。教育委員会の人が私を呼んだのは、水没する前に、中国山地の砂鉄採取のための鉄穴（かんな）流しによる跡地と比べて、どうなのか見てほしいと言うものであった。

当日、ダムサイト横の眺めの良い広場につき、周囲を一望した途端、私が以前に持っていた浅はかな期待は、一瞬のうちに脆くも崩れてしまった。自然地理学的見地など陳腐なことで、藩政時代の採掘者たちは、

しっかりと広い河岸段丘面に気づいて、河原などには大して目もくれず、段丘面を櫛で搔いたように、丹念に切り刻んでいたのである。彼らは段丘の端から内側に向けて、直径30cmもあるような玉石を含んだ砂礫層を、数m下の岩盤上まで筋状に掘り込み、そこへ上流から引いた水路の水を流し込み、基底付近の砂を洗い流したのである。跡地は、あたかも長いカマボコを並べたように刻み込まれており、大きな石を溝の脇に積み上げる作業はさぞかし重労働であったことを物語っている。ここでは極めて微粒の砂金が採れたという。深層風化した花崗岩の山を大きく削り崩して、砂鉄を採取するという鉄穴流しの技法とは、大きく異なっていたが、美利河川流域の砂金採取に伴う地形改変も、当時としては、かなり大規模なものであるようと思われる。美利河川の台地上の砂金採取については、矢野牧夫氏が、道新の連載で紹介しているのを後で知ったが、北海道各地の砂金採取地では、実際にどのような地形改変が行われていたのだろうか。自然環境、すなわち、人にとっての自然、の変遷に興味を持つ私としては、まだ砂金がのこっているはしないかと言う下心も手伝って、何かの折りに調べてみたいと思っている。

## 藤ノ木古墳を訪ねて

木村 栄ノ進（札幌新川高校）

昨年10月、発掘中の斑鳩の里、法隆寺に藤ノ木古墳（旧地名の子字名をいう）を訪ねた（図1）。すでに石窟の開棺から数日経過、石棺より出土した多くの遺物は権原研究所（権原市）に収蔵され未公開部分も特段の配慮で目に触れることができた。予備調査以上の豪華絢爛を極め考古ファンはもとより1400年前の太古の歴史にひきびり込まれる貴重な例証としてのペールを脱いだ。

地方にみられるこの時代の墳墓にない多くの副葬品から高貴なものと思われる被葬者を裏づける豪華さに目を奪われる思いがした。盗掘の悲劇にさらされることがなかったのもこの墳墓がいかなる意味をもつてい

たか興味のあるところである。

この時代の背景や古墳とのかかわりなどについて考えてみたいと思う。

〈古墳時代〉 弥生から古墳時代にかけて、死者を葬る風習の中に「墳墓觀」なるものが現ってきた。とりわけ近畿地方を中心にひとつの墓制ができていく。方形周溝墓が近畿に多く見られ、墳墓の形態が「家族的」、「政治的」イメージとして基本にある。

故人を弔うことは、来世においても死者の世界に大地を提供することにあったと思われる。集落の外に墳墓の景観がみられるのは、生者と死者の世界をはっきり区別している。この頃、他地域より入って来る人々

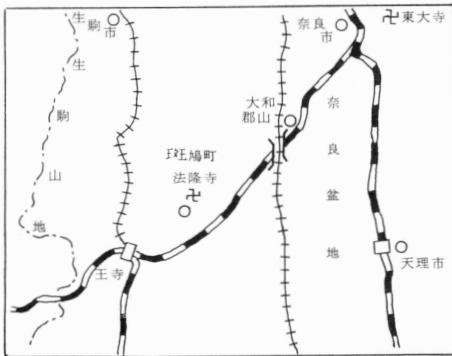


図1 藤ノ木古墳周辺地域

(畿内：今の近畿地方)が多かったのは、彼らにとつて終局の地であったのが、畿内であつてよい。遺跡から家族的色彩のものが多く見られる他地域の墳墓に対して、特に畿内の墓制は、政治的、社会的因素と思われる特徴が副葬品、外觀等に強くあらわれている。

これらのものが「古墳」として位置づけられ、その初期のものに「前方後円墳」といわれる特色的なものが出現している。

奈良平野の東に古墳の初期のものが点在し、中でも箸墓古墳はよく知られているひとつである。墳墓の規模からして造営に投入された人員などは膨大ではかり知れなく、今までのものとは画一性を異にしているものと考えられる。これらのものが東北から九州までみられることは、中央の権力が地方にも及んでいることを示すものである。

6世紀中頃には墓制に変化が出てきた。横穴式石室

をもつ円墳の時代が到来してきたのである。このものは、中国、朝鮮半島に源を発し、異文化との交流が行われていたわけである。円墳、横穴の世界への移行はいかなることによるものか、いくつかの推察が可能である。

藤ノ木古墳はそのひとつの例であろう。自然の地形を利用した横穴式は、崖を掘って墳墓としたことでは今までの造営の技術を駆使するに至らない、経費もかからない方法であり、構造的にも耐性にすぐれているところに特色がある。これらのものは群集墳として存在していることや、集落を離れたところに多くみられることも特色のひとつである。

7世紀に入って墳墓が畿内から姿を消している。しかしながら、高松塚古墳などの豪放なものがみられたので完全に消えているわけでもない。石室の内部が装飾性を思わせる見事な墳墓で、地位の高い人物を葬送したことは明らかであり、副葬品に目をみはるものがあり、権力の象徴を印象づけている。

以降、唐風習の火葬が定着していくことを契機に墳墓が消えていった。

〈形態・特徴〉 藤ノ木古墳は横穴式石室を備えた円墳である。横穴式石室（図2）の由来は朝鮮半島にみられ、4世紀後畿内政権がこの地にも及び、百濟、新羅を属国として支配したが、後に新羅に征服され日本府の任那支配が終っている。このようななかかわりが墳墓観に1ページを添えている。

この円墳は石室の奥壁沿いに大きな家形石棺（図3）を配し、手前になお1、2棺配置する余裕を残してい

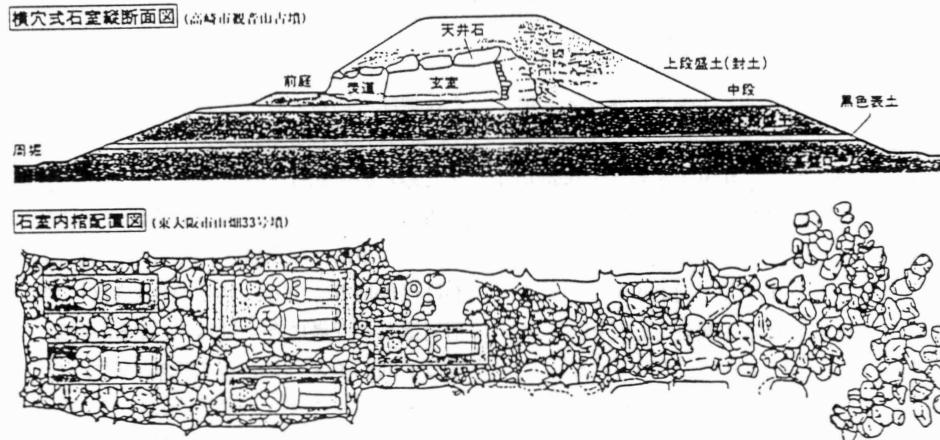


図2 横穴式石室をもつ古墳の構造（群馬県教育委員会による）

る。これらは、戸主の死を契機として築かれ、縁のあるものが順に追葬されていくものとも考えられる。「家族」とみてよい墳墓であったのか。

家族のために墳墓が幾世代をも考え、比較的大きく造られたが、諸事情により子孫が絶えていったのであろうか。「墳墓を豪華に構えるとその家系は絶えてしまう」というこんな言葉を思いおこすのである。

石棺には金銅製の馬具、大刀が並び、数多くの須恵器、土師器が置かれているが、元来土師器は朝鮮より移入したものが多く、そのかかわりの深さがうかがえる。

〈被葬者考〉 誰を葬ったか……一番興味のあるところであるが、まわりくどい話も必要ないほどのことである。研究者によって要を得た被葬者論が展開されて

表1 出土品一覧

人骨	北側 南側	ほぼ全部位がそろう。20歳代の大柄でがっしりした男性 足元以外は残りが悪い。成人大が性別、年齢不明
装身具・副葬品	冠	金銅製。広帯式冠帶に双樹の立ち飾り。高さ35cm。鳥形、剣菱形、「山」字形の透かし彫り。鳥形、針葉形の歩搖多数。
	大帶	金銅製か銅製。内側に皮革？ 幅12.5cm、長さ約1m。バックルがはずされ、折りたたまれていた。
	大履帶	金銅製2足。北側が38cm、南側が42cm。亀甲つなぎ文。円形歩搖多数、北側には魚形歩搖。
	履	金銅製1対。半筒形で両端にリボン。長さ36cm。魚形と円形歩搖。
	すね飾り	金銅製1対。半筒形で両端にリボン。長さ36cm。魚形と円形歩搖。
	筒形金銅製品	長さ39cm、両端径6cm、中央部径3cm。中空。中央にヒモ。ハート形歩搖多数。
	大刀	北側に2本、南側に4本。北の1本と南の1本は、三輪玉が付きブルーのガラス小玉を散りばめた長さ137cmの玉縫大刀。北のもう1本にもガラス玉。連弧輪状文の象眼。
	漁刀子	北の大刀に伴い1対（長さ19cm）。南の大刀に伴い2対（19cmと24cm）。
	鏡	大帶の中などに5本。銀装。35cm。刀身が短い。南側の大刀の中にも1本。
	かんざし	北の被葬者の頭部付近に3面。径約22cmの画文帶環状乳神獸鏡、径16.5cmの画文帶神獸鏡など。
浮遊物・その他	耳輪	南の被葬者の頭上方に1面。径18.4cmの獸帶鏡（七子七獸鏡）。
	首飾り	北の被葬者に1対。銀製。兵庫の垂飾飾りがつく。
	腕輪	金製、北と南に1対ずつ。径約3.5cm。
	足輪	北の被葬者に空（うつろ）玉、くちなし玉などで3連。銀に金メッキか金と銀の合金。南に銀製空玉1連。
棺外遺物	ガラス小玉	浮遊物の中から綿の「手纏」。
	その他	南の被葬者からガラスの足玉。
	馬具	黄、オレンジ、緑、ブルーなど1万個以上。直径2~4cm、すべてに穴。北の被葬者の上半身の下にはすだれ状に類例のない背飾り。
棺外遺物	土器	北の被葬者の頭付近に金銅製と銀製の剣菱形金具。先端にガラス玉をはめ込んだ銀製勾玉、大きなガラス玉など。
	埴輪	浮遊物の中に平絹、絹綿、綾、羅、繡の絹織物片や撚紐（よりひも）、糸総（いとふさ）など。遺体をくるんだ布、遺体の掛け布、褥（じょく）のような方形布、刀や鏡の包み布などらしい。棺底にも敷布。
	その他	円形金銅製（経3.3cm）100枚以上。掛け布に付いていたらしい。
	有機物	花弁形金銅製大（長さ3.5cm）と小（長さ2.3cm）数百個。馬具の歩搖を入れたらしい。
棺外遺物	馬具	棺底にたい積。浮遊物には木片と朱も。
	土器	金銅製1セット。鞍金具は亀甲つなぎ文にゾウ、獅子、パルメットなどを透かし彫り、東アジア隨一とされる。ほかに鉄地金銅張り2セット。
	埴輪	須恵器の高杯など約60個。中世の灯明皿も
	その他	墳丘上に小量
		挂甲、鉄矢じり、鉄刀1本など

(橿原考古学研究所調査、奈良新聞掲載)

きた。被葬者の解明にとって有益なことは、いつの時代のどんな身分の人かということがわかると、歴史観を考えるにあたって確実な例証が得られて便利である。国内に存在する古墳は数知れないほどあるが、その中で被葬者が断定できたものがひとつもないほどである。推定できるにとどまっているのみである。

藤ノ木の被葬者として候補に上がった人物を2、3  
みていくと、当時畿内の権力者は豪族の掌中にあって、  
中でも伝統的名門豪族の物部氏、斑鳩地方を最大の地  
盤としていた彼のライバルであった蘇我氏、共に劣ら  
ぬ勢力をもって対峙していたのであろう。出土した副  
葬品（表参照）から皇族派という説が濃厚になってい  
る。

人骨 2 体、国際性豊かな超一級の馬具など在地豪族で半島外交につながりのあった膳氏、在地性のある平群氏の名も上がっている。史実の一面から考えると、聖徳太子との縁者説が有力視されているが、「日本書紀」の内容は信憑性という点から異議とする点が多く、なかなか人物を確定する材料としがたいのが事実のようである（図 4）。

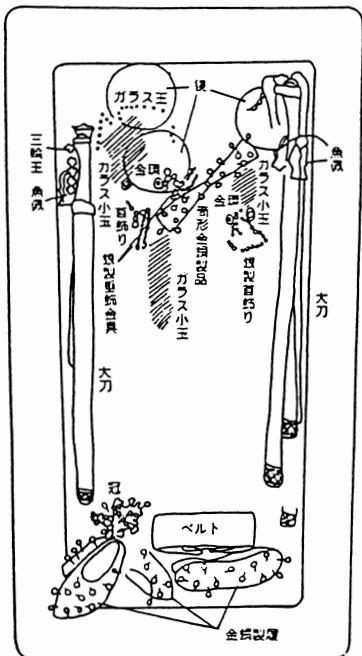


図3 石棺。二上山の凝灰岩で作ったくり抜き式家形。長さ 2.35 m, 最大幅 1.26 m, 最高 1.54 m, 繩掛け突起 4ヶ所, 内部の長さ 1.94 m, 幅 94.5 cm, 高さ 84 cm, 内面全部朱塗布。

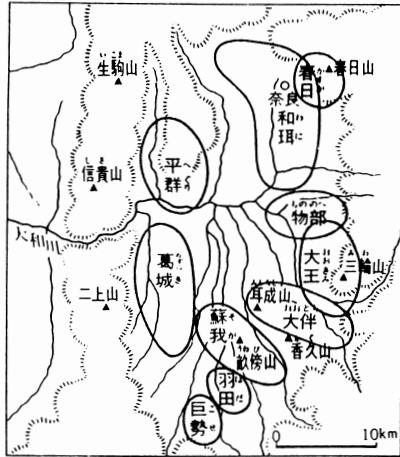


図4 大和豪族の地盤推定地域

すでに前述したが、古墳の形状、規模、多彩な副葬品、中でも大刀が3本……これは伊勢神宮の式年遷宮で調進する60本の大刀のうちで最高級品、製作するには一振1億円以上を要するといわれる玉まきの大刀そっくりにガラス玉を散りばっているなど、皇族級の人物にふさわしいとする説は見逃せない。古墳の近くに住む古老人から代々「ミササギ」と言い伝えられてきたという話も無視できない点である。

法隆寺とのかかわりも興味のあるところである。研究者の間に、江戸初期の「和州旧跡幽考」で磐隈皇女の藤ノ木埋葬説、また穴穂部皇子、宅部皇子の男2人説は皇位継争で蘇我馬子に殺された人物を焦点に当てている。穴穂部は馬子だけでなく、推古天皇に憎まれていたといい、皇族の墓より離れた所に墳墓が営まれている点はつじつまの合う話である。

古墳は法隆寺南大門より西方向におおよそ100余メートル、西に伸びる低い丘陵上にオワン状の丘が円墳と確認されるまで雑草の茂る空間地であった(図)

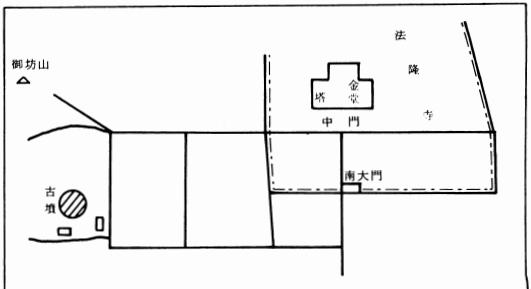


図5 藤ノ木古墳の位置と法隆寺

5)。盗掘されず放置されてきたことも、人々が近づくことすら許さない高貴な人物であったのか。古墳の位置（玄室）が東の方向に向いて造られている。丁度その方向の桜井は当時の「宮都の地」であるが、被葬者の思慕なのか、憎しみなのか、1400年も眠りつづけてきた人物が、又もや現代人の話題の渦中になろうとは……。権力者の消長交替によって悲劇の人物となつたことは確かである。

#### 参考文献

- 「日本の歴史」朝日新聞社編
- 「古代史を解くカギ」有坂隆道
- 資料協力：
- 樅原考古学研究所編「石舞台から藤ノ木古墳」